

2017年1月19日

2016年度学生研究発表大会総括

学生研究発表大会

世話人 望月和彦

2005年度から再開された学生研究発表大会は年々規模が大きくなり、2013年度から予選と本選の二段階審査方式をとるようになった。今年度はこの二段階審査方式の4年目に当たる。

今年度の学生研究発表大会予選への参加は経済学部、社会学部、経営学部の3学部の12のゼミから33の個人・グループとなり、前年度の27と比べると22%増となった。ただし2014年度は46であったので、ピーク時に比べるとお28%少ない状況であると言える。

予選は11月23日（水）午後1時から3時までの間でヨハネ館の4つの会場に分かれて行われ、計19人の先生方に各会場でコメントと審査をお願いした。

審査の結果、7つの報告が本選に進み、その他に準佳作として各会場で8つの報告が選ばれた。本選に進んだ報告の内訳は、経済学部から6報告、社会学部から1報告である。

例年であれば予選は12月に入ってから行われるが、今年度は教授会の日程および学生懸賞論文の締め切りを勘案して、例年よりも2週間早く予選を行うことになった。それでも前年度に比べて参加報告数が増加したことはうれしい「想定外」の結果である。これもひとえに指導教員の熱心な指導のたまものであり、本学におけるゼミ活動の水準の高さを示すものである。

2017年1月11日（水）に2-201教室（ハイビジョンシアター）において本選が行われ、予選を通過した7つの報告が行われた。またそれぞれの報告について各1名のコメンテーターの先生をお願いした。

いずれの報告も明確な問題設定がなされ、先行研究にも触れながら、仮説

を立て、それを検証し、考察を行うという研究の基本的手順に従っており、そのプレゼンテーションもしっかりできていたように思われる。また先生方も非常に熱心にコメントされ、まさに学生と教員との間の「真剣勝負」のようなムードとなっていた。コメントを頂いた先生方には改めて感謝したい。

審査の結果、最優秀賞1組と優秀賞1組そして佳作5組という結果となった。しかしいずれも甲乙つけがたく、内容的には僅差であった。今年度の本選での報告の水準はこれまでにないところまで高くなったと言える。その意味で二段階選抜方式の効果はあったというべきであり、将来、このイベントを外部に公開する基礎はできあがったといつてよいのかもしれない。

今年度の本選の審査員として昨年度に引き続き竹井源五本学教育後援会会長にお越し頂くとともに、新たに藤田茂本学同窓会副会長にもお越し頂いている。ご多用中にもかかわらず、本学における学生の研究発表についてご審査頂きまことにありがたく、感謝申し上げる次第である。

昨年度より教育支援課から運営協力を頂いている。来年度からこのイベントは学生論集刊行委員会から分離し、教育支援課のもとで独立したイベントとなる。このイベント運営をどう組織化していくのかは来年度以降の重要な課題となろう。教職員のみなさまのより一層のご理解とご協力をお願いする次第である。

以上